

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19H01627

研究課題名（和文）授業分析の学術的高度化と国際化による授業理論の再構築

研究課題名（英文）Reconstructing theory of teaching and learning through upgrading lesson analysis

研究代表者

柴田 好章（SHIBATA, Yoshiaki）

名古屋大学・教育発達科学研究科・教授

研究者番号：70293272

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、教育学の基礎的研究としての授業分析の学術的高度化・国際化を通して、授業理論の再構築を担う新たな学術基盤を形成し、社会的・文化的・歴史的な要因と整合する教育理念や教育技術の理論的体系化を図ることを目的とした。逐語記録にもとづく授業分析による授業諸要因の関連構造の顕在化を試みた。特に問題解決学習における思考の様式を中間項の形式によって明らかにするなどの成果を得た。所属機関の研究倫理審査を受審し、保護者の同意を取り、授業分析をもとに教師教育用の教材を開発し、教員研修や教員養成にも役立てるような仕組みを構築した。授業記録の収集・保管・分析をセキュリティの管理のもとで行える仕組みを整えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、アカデミックな基盤研究として、教育の理論的基盤を強めるための研究として、基礎研究としての授業分析に取り組むものである。授業分析は、応用研究・臨床研究としての授業研究の一部またはその基盤として位置つきながらも、教育学的概念の発見ないしは再発見による理論構築すなわち基礎研究のための役割が求められる。本研究は、授業分析の高度化・国際化により、授業理論の構築に道を開くものであり、この点に学術的な意義がある。併せて、授業分析の方法論、方法、知見を適用した、授業改善、教師教育の発展にも寄与する点で、実践的な意義を有している。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to form a new academic foundation for the reconstruction of theory of teaching and learning through the academic advancement and internationalization of lesson analysis as basic research in pedagogy, and to theoretically systematize educational philosophy and techniques that are consistent with social, cultural, and historical factors. We attempted to clarify the structure of the relationship among various factors of teaching and learning through transcript-based lesson analysis. In particular, the research results revealed the thinking styles in problem-solving learning in the form of intermediate descriptive terms. After undergoing a research ethics review by the institution, we obtained the consent of parents to record lessons, developed teaching materials for teacher education based on lesson analysis. A system was established to enable the collection, storage, and analysis of lesson records under security control.

研究分野：教育学、教育方法学

キーワード：授業分析 授業研究 授業理論 逐語記録 授業諸要因の関連構造 中間項 問題解決学習 名古屋大学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

過去 20 年間、日本の授業研究は海外から注目され、海外においてもこれを取り入れる動きが活発であった。World Association of Lesson Studies が 2006 年度に発足し、日本の授業研究国際的な研究ネットワークが発展してきた。また国内においても実践的な教師教育や大学・学校間連携の強化によって、教育実践を対象とした研究の機会が増大している。学校教育現場と連携した授業研究(教育実践研究)の活性化によって、授業(教材・カリキュラム)の開発や改善、教師の成長が図られてきた。

しかし研究の多くは応用的・実用的・臨床的研究であり、研究者が教育現実と接することによって教育学の基礎理論が十分に発展してきたとは言いがたい。教育現実に対応した理論生成の役割を、教育学研究者を果たしていく必要がある。教育実践を創造・展開する上では教育理念や教育技術が重要であることはいうまでもないが、それらが機能するためには、社会的・文化的・歴史的背景の固有性に根ざし相対的に理論と実践を捉え直す視野が必要である。一方で、これらの相違を乗り越えた上で、学習機会の保証という理念の普遍性という観点からも、理論と実践を問い直す必要がある。ここで問題とする学習機会の保証とは、単に授業に参加している(着席している)ことにとどまるものではない。情報化が進化した現代社会や将来の社会では、知識伝達だけでは学校の役割は不十分である。児童・生徒が多様で個性的なアイデアを持ち寄ることによって「今、ここでしかできない、私たちの学び」を実現することが求められる。真の学習機会の保証とは、一人一人の児童・生徒が納得のある学びや協同のある学びに十全に参加していることを意味する。そのための理論構築を志向して、本研究では教育実践場面(すなわち、授業における学習過程)に立ち返り、その詳細な分析を試みる。日本でも世界各国でも、授業の改善と教師の成長のために授業研究に取り組みられているが、独立変数としての授業方法と従属変数としての学習成果の相関という表層に分析の射程がとどまるのであれば、社会的・文化的・歴史的な要因を深く考察することはできない。

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育方法学研究室では、教育学の基礎理論の構築を目指し、「授業分析」の研究を 60 年以上にわたって継続してきた(重松鷹泰 1961、日比裕 1978、的場正美・柴田好章・他 2013)。この研究グループは、逐語記録をはじめ詳細な授業の記録を収集し、緻密に分析することを特徴としている。加えて、「児童発言にみる授業の 5 段階」(日比裕 1978)、「問題解決学習の成立要因」(柴田好章 2011)などの理論的な知見を、授業分析を通して産出してきた。

これらをふまえ本研究は、授業分析を詳細な授業の記録とその分析と定義した上で、これを「教育学の基礎研究」の有力な手段として位置付ける。授業を構成する諸要因を導き出し、それらの関連構造を明らかにすることによって、教育学の理論構築をめざす。教育現実に対応しうる理論を教育現実から導き出すことが、本研究の特質である。教育実践現場は教育学の知見の適用の場と考えることもできるが、むしろ本研究では教育実践現場を教育学的概念の発見ないしは再発見の場として位置付ける。そして、名古屋大学が長年にわたり推進してきた逐語記録にもとづく詳細な授業分析の方法を発展させることにより、社会的・文化的・歴史的な要因と整合する教育理念や教育技術の体系的な理論を構築することを目指す。

2. 研究の目的

本研究は、教育学の基礎的研究としての授業分析の学術的高度化・国際化を通して、授業理論の再構築を担う授業分析の新たな学術基盤を形成するとともに、社会的・文化的・歴史的な要因と整合する教育理念や教育技術の理論的体系化を図ることを目的とする。

社会的・文化的に適合する実践および理論を構築するためには、現実の文脈の中で生起している具体的な事象の分析の反復によって、理論を洗練させていくことが必要である。そこで本研究は教育現実をもとにしながら、理論適用としての応用研究ではなく理論構築のための基礎研究に授業分析を位置付ける。この点に学術的独自性がある。

また、教育実践は基本的に一回性という特質を有し、学習者や状況によって異なり、統一的な予測や説明を行うことは難しい。相互規定的に諸要因の関連構造を究明するアプローチによって、個別性と一般性の相補的な発展を試みる。この点に学術的創造性がある

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するため、A 理論的研究課題 2 点、B 開発的研究課題 2 点を設定する。

〔A 理論的研究課題〕

【A1 授業論的課題】 本研究では 納得のある学び 協同のある学び のような質の高い学びを創造するために、拠りどころとなるべき授業論の再構築を図る。そのために、これまでに収集した授業記録や、本研究で新たに収集する国内外の授業記録(逐語記録・映像記録)をもとに、授業の詳細な事実にもとづいた授業分析を行い、国内外の主要な学習理論や授業理論と接合させ、授業諸要因の関連構造を顕在化し、社会的・文化的・歴史的な要因の相対性と普遍性を検討する。日本の小・中・高等学校における複数の教科を対象とするとともに、交流協定や連携関係を

有する国・地域の学校における授業も対象とする。

【A2 研究方法論的課題】 詳細な授業記録の分析によって、個々の実践の具体的な状況や文脈に根ざした研究知見が得られることになるが、それらを集積するだけでは体系的な理論の構築には至らない。事例分析による個別の研究知見を共有し理論化を図るためには、個別性と一般性を統合するパラダイムが必要である。体系的な理論の構築に向けた一般性をも志向し、個別の状況や文脈を重視する相対主義的なパラダイムと、授業分析の方法を検討する。そして、日比裕ら(1992)や柴田好章(2013)によって提唱されてきた「授業諸要因の関連構造」の究明や、授業分析法としての「中間項」の研究を発展させ、相互規定的に要因相互の関連性を顕在化し、諸要因の関連構造を究明するための相対主義的なパラダイムと研究方法を確立する。

〔B 開発的研究課題〕

【B1 研究倫理に適合する標準プロトコル開発】 専門性を有する限定的な研究者(実践者)の間で、授業記録などのデータの共有・利用が可能になるよう、研究倫理に配慮したデータ収集・利用の標準プロトコル(記録管理ガイドライン)を作成する。本研究で収集した授業研究データのうち、標準プロトコルによって収集されたものについては、一定の要件を課した専門家にも利用できるような仕組みを構築し運用する。

【B2 授業分析システムの開発】 授業記録・分析結果等を、研究者(実践者)間で共有するために、研究情報の蓄積・配信機能と、授業分析(データ解析)の支援機能を有するシステムを開発する。データの収集・蓄積・活用の標準プロトコルを定め、汎用性のあるシステムを採用するとともに、機密性を保持するために厳密なセキュリティの管理を行う。

4. 研究成果

〔A 理論的研究課題における研究成果〕

【A1 授業論的課題における研究成果】

問題解決学習における思考様式の研究

納得のある学びや協働のある学びの典型として、本研究は問題解決学習に注目した。戦後初期社会科の理念でもある問題解決学習は、よりよい生活・社会の実現を希求し、生活において直面する問題や、社会の中で起きている問題に向き合い、その問題を解決しようとする探究のプロセスにおいて生起する学習である。AIが発達し第4次産業革命が進行する社会へと移行する今日において、先行きが不透明で予測困難な社会で生きていく子どもたちには、これまで以上に主体的・協働的に学ぶことが求められている。AIの発展によるイノベーションに期待が高まる一方、雇用の喪失や人間性の疎外などへの不安も高まっている。また、地球規模での環境問題や安全保障など、人類の生存に関わる諸問題が山積している。そこで、問題解決学習の理念や授業論に改めて注目することには今日的な価値がある。そこで、本研究では、問題解決学習における学習者の思考様式の特徴や、その成立要因を理論的に解明するために、問題解決学習や探究的な学びの授業記録を収集し、授業分析をおこなった。

柴田好章ほか(2023)が分析した事例では、例えば21TDの発言には、問題解決学習に特有の思考様式が見られ、事例、概念、構想が組み込まれている。なお、21とは、本授業開始からの発言の番号であり、TDとは、発言した生徒の仮名である。発言中の波線部は事例を、実線部は概念を、二重線部は構想を示している。このうち、四角部が問題解決の見通しに至る過程を示している。

21TD はい。僕はK農業っていうところに取材に行っただけですけど、Kさんは360ha、東京ドーム約八五個分の土地で大規模な農業をしているんですけど、今日日本で耕作放棄地ってあって、その農地なんだけど、耕作がされていない、しかもそれでそのまま放置、放棄されているっていう土地が増えていて、Kのところではその耕作放棄地を預かって大規模な農業をしていて、今儲けられないっていうイメージがついているんですけど、Kみたいにすごい儲けている人もいますので、その、農業でもちゃんと儲けられるようっていうのを、ためらっている、始めようかなってためらっている人とか若者とかに発信していくことができれば、もっと新規就農者も増えるんじゃないかな。

*伊倉 剛(2018)「強かに生きる：よりよい社会を目指して」。社会科の初志をつらぬく会 編 『考える子ども, No.387, p.118-137.』

以上の発言における問題解決の見通しに含まれる事例、概念、構想を、中間項と呼ぶ記述形式に変換すると以下の通りになる。

A [成功事例]

A-1 [Kさん・する - (大規模な農業) ~[360haの土地]~[東京ドーム]]
A-2 [Kさん・する - (大規模な農業) by [Kさん・預かる - 耕作放棄地]]
A-3 [Kさんみたい・すごい儲けている]

B (概念化)・・・概念をしめす()

B (農業でも：ちゃんと儲けられる)

C {解決構想}・・・構想を示す{ }

C {発信する - (農業：ちゃんと儲けられる) - (就農をためらっている人, 若者)}
>> {(新規就農者)：増える~もっと}

以上の通り、授業分析の手続きとしての中間項の記号の形式によって、問題解決学習に特

有の思考様式が、[A:成功事例] (B:概念化) - { C:解決構想 }のように、顕在化できる。また、A の具体と B の一般は、[K さん] [K さんみたい] (農業でも)のように段階的に変化しながら接続している。

さらに、問題解決学習においては、問題の把握においても、事例、概念、構想が組み込まれており、それは、[a: 具体問題] (b: 問題状況) - { c: 解決願望 }のように、顕在化できる。どの発言にも全てが含まれているのではなく、21TD の発言では、実線部であって四角部ではない箇所に、耕作放棄地の増加や、儲けられないイメージといった (b: 問題状況) についての概念が見られる。

このように、各発言を中間項を用いて分析することにより、問題解決学習における典型的な思考様式や、生徒それぞれの特徴的な思考様式を中間項の形式として顕在化させることができる。

問題解決学習における思考様式

	問題状況の把握		問題解決構想				
	〔解決願望〕	〔問題状況〕	〔具体問題〕	〔成功事例〕	〔概念化〕	〔解決構想〕	
7HN		悪い3Kイメージ				→新3Kイメージ	
21TD		農業イメージ儲けられない耕作放棄地:増えている		[Kさん、する→大規模な農業]b)[Kさん、預かる→耕作放棄地]	→	発信する→(農業、ちゃんと儲けられる)→就農をためらっている人、若者)→(新規就農者)増える→もっと)	
23KZ		〔新規参入→大規模農業:できない〕	←	〔申請→農地の売買や貸借〕[規則:たくさん]		←	〔かもしれない→[KKさん]のように〕→〔農業→土地が広い、儲けられる〕

問題解決学習における「問題」(問い)のあり方の研究

さらに授業分析の成果に基づきながら、問題解決学習における「問題」(問い)のあり方を解明し類型化をおこなった(柴田 2024a)。まず、これまで問題解決学習は、学習者にとって切実な問題であることが重視されてきた。戦後初期社会科においては、学習者自身の実生活における問題が取り上げられていた。ただし、最初は自分の生活上の困難さを発端とする切実な問題でなくても、問題を放置しておけない当事者性が芽生えることにより、切実な問題になることもある。「問題」のあり方をめぐっては、「切実性論争」として1980年代より繰り返し論じられてきた。

(認識志向の問題)

この年中行事は、なぜ長く続いていたのだろうか。

この年中行事にたずさわっている人々は、どのような思いで、どのような工夫や苦労をしているのだろうか。

(解決志向の問題)

長く続いていたこの年中行事が、これからも続くようにするにはどうしたら良いだろうか。

この年中行事が、これからも続いていくために、自分に何ができるだろうか。

や は認識を志向した学習問題であり、や は解決を志向した学習問題である。解決を志向したや の問いの成立の背後に、「これまで続けられてきたこの伝統的な年中行事が、なんとか続くようにしていきたい」という願望があることにより、切実な問題となりうる。しかし、や が、や のような問いと切り離されて独立して追究されるのであれば、切実な問題とはなり得ない。「知りたい」「わかりたい」という認識の切実性だけでは、問題解決学習における真の切実性とはいえない。反対に、や の問いも、や のように年中行事が続いてほしいという願望と結びつくことにより、問題解決に欠かせない問いになる。

このように、認識の切実性は、単独では問題解決学習における切実な問いとはいえず、子どもの願望や自我関与を含み込んだ解決の切実性を伴うことによって、問題解決学習における問題を構成することができる。反対に、解決の切実性は認識の切実性を伴うことによってこそ、問題解決に向けて動き出すことができる。問題を正しく認識してこそ、解決にむけた方策を考え決めることができるのである。また、解決を志向するからこそ、対象に正体し、できるだけ詳しく理解し、正しく判断しようとするのである。さらに切実性は、批判的思考や論理的思考を生み出す契機となる。つまり、認識の切実性は単独では問題解決学習の成立要因としては不十分であるが、解決の切実性によって生み出される認識の切実性は、問題解決学習に欠かせないものである。裏返せば、認識の切実性を欠いた解決の切実性だけでは問題解決学習は成立しない。

(本質志向の問題)

この年中行事は、これからも続けるべきであろうか。

伝統を受け継ぐということは、どういう意味であろうか？

従来は地域住民の手によって行われてきた年中行事が、担い手の不足により地域の人々以外の手も借りながら継承されている例もある。伝統文化の継承といっても、社会情勢などによって内容が変化していくことも少なくない。当初は、「続けていきたい」「そのために何ができるか」と考えていた子どもたちも、追究が進むことによって、「続けるべきか」あるいは「変えても受け継いだことになるのか」「受け継ぐ 続ける」といとはどういう意味なのか」が問題になってくる。「どうしたら続けられるのか」という当初の問いの中では、「続ける」とは何かは自明であったはずである。その自明であったところの「続ける」ということの意味や目的に揺らぎが生じてきてくる。つまり、当初の問いに含まれていた自明な意味や目的自体を問い直しており、「問いを問う」動きといえる。こうした子どもの動きは、深い学びの一つの証であるといえよう。「問いを問う」子どもの姿は、問題解決学習が深まることによって、しばしば観察されている。

【A2 研究方法論的課題における研究成果】個々の実践の具体的な状況や文脈に根ざした授業分析の知見を共有し理論化を図るために本研究では、授業分析用の中間記述言語としての中間項の開発と適用を行うとともに、名古屋大学教育方法学研究室グループの授業分析の研究方法論の検討を行った。中間項とは授業の事実（記録）と、事実の分析によって得られる理論（授業諸要因の関連構造）の間の段階に位置するものである。定義された記号を用いて、授業記録（発言）を変換する、いわば中間言語である。

中間項の記号の例

[]	事例・例示	B—C	C を/に B する
()	概念	> >	推移・順接
{ }	構想	IF	仮定
A・B	A が B する	Than	比較
A:B	A は B である	∴	ゆえに
A~B	B である A	∴	なぜならば

「既存の仮説の排除」(重松 1961)を掲げる授業分析にとっては、事実に基づき事実に即した理論を構築するために詳細な逐語記録を中心とする授業記録を重視している。授業諸要因の関連構造を解明する上で、“事実に即する”という原理にもとづく授業分析において、中間項を用いることで、授業分析者の解釈過程における過度な飛躍を自制することがねらいとされてきた。観察された事実と、事実から得られた概念の間で解釈が飛躍しすぎないように中間記述の段階を設けて、事実から結論までの解釈過程の追跡可能性を高めるために、中間項は有効である。ただし、授業記録から一意に中間項が導かれるのではなく、分析者の授業洞察力(柴田 2012)による主体的な解釈が介在する。表現された中間項には、事実としての発言とともに分析者の解釈も含んでいる。主体的な選択の過程には、“理論負荷性”が暗黙に働いている。分析結果から理論を構築という理論構築型、仮説生成型を目指しつつも、あらかじめ有している理論に分析結果が依存することになってしまう。どのような事実を取りあげ、その事実によつてどのような意味付与をするのかにおいて、分析者は完全に中立的になることはできず、観察した事実の解釈に先行して有している暗黙の内に自明視している価値観や理論に依存している(理論負荷性)。学習者の発言の意図、含意、文脈にまで踏み込んで分析する上で、分析者の解釈を含まざるを得ない。本研究では、これまでの一連の中間項研究の成果と課題を踏まえ、分析者の解釈も積極的に記述の対象に含めることによって、授業諸要因の関連構造の解明のための授業分析手法としての中間項を発展させた。学習者の発言意図・含意・文脈を明示する中間項の記述方法を考案し、問題解決学習における生徒の思考過程の顕在化させることができた。

〔B 開発的研究課題における研究成果〕

【B1 研究倫理に適合する標準プロトコル開発に関する研究成果】 授業研究・授業分析の基礎資料となる授業記録の収集・分析・管理にあたって、研究倫理に配慮したデータ収集・利用の標準プロトコル(記録管理ガイドライン)を作成した。所属機関の研究倫理審査を受審し、保護者への同意を取り授業を記録し、分析・加工した授業記録をもとに教師教育用の教材を開発し、教員研修や教員養成にも役立てるような仕組みを構築した。

【B2 授業分析システムの開発に関する研究成果】 授業記録の収集・保管・分析や、分析結果の活用等をセキュリティの管理のもとで行えるような仕組みを整えた。授業逐語記録を対象とした計量的な授業分析手法をシステム上で実現できるように整えた。

〔波及効果〕

本研究は、アカデミックな基盤研究として、教育の理論的基盤を強めるための研究として、基礎研究としての授業分析に取り組むものである。授業分析と授業研究は、それぞれ理論構築、実践開発という指向性の違いもあるが、教師教育・授業改善のための授業研究に、授業分析の方法や、授業分析により得られた学術的な知見が生かされることが求められる。

本研究課題の成果をもとに、教師の授業洞察力と授業構想力の向上を目的として、授業記録の抜粋と発問からなる教師教育用教材を開発するプロジェクトを立ち上げ、その成果を柴田(2024b)にて報告している(三菱みらい育成財団「探究的な学びを通じて個性的で自立的な生徒を育成する教師の洞察力と構想力の育成」)。

また、モンゴル国立教育大学のアリウンジャルガル氏らと共同し、逐語記録に基づく授業分析に関するモンゴル語の書籍をモンゴルにおいて出版した。

重松鷹泰(1961)『授業分析の方法』明治図書。

柴田好章(2007)「教育学研究における知的生産としての授業分析の可能性-重松鷹泰・日比裕の授業分析の方法を手がかりに-」『教育学研究』74(2), 189-202.

柴田好章(2012)「教師を育てる教師に求められる力量としての「授業洞察力」」『日本教育学会大会研究発表要項』71, 200-201.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計23件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 柴田好章	4. 巻 9
2. 論文標題 探究的な学びを通じて個性的で自立的な生徒を育成する 教師の洞察力と構想力の育成（第1年次報告）	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 名古屋大学大学院教育発達科学研究科高大接続研究センター紀要	6. 最初と最後の頁 2-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tan, S., Nozaki, S., Fu, H., & Shibata, Y.	4. 巻 43(1)
2. 論文標題 The principles of teacher's decision-making in Japanese board writing (bansho) process	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Asia Pacific Journal of Education	6. 最初と最後の頁 236-251
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/02188791.2021.1924119	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 柴田好章	4. 巻 18
2. 論文標題 一人一人の個が育つ協同の教育のあり方	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 協同と教育	6. 最初と最後の頁 130-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Arani Mohammad Reza Sarkar, Gao Yimin, Wang Linfeng, Shibata Yoshiaki, Lin Yanling, Kuno Hiroyuki, Chichibu Toshiya	4. 巻 0
2. 論文標題 From “content” to “competence”: A cross-cultural analysis of pedagogical praxis in a Chinese science lesson	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 PROSPECTS	6. 最初と最後の頁 0
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s11125-022-09630-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Nozaki Shiho	4. 巻 11
2. 論文標題 The study of students' discussion process in a teacher-developed problem-solving learning design: Transcript-based lesson analysis of a social studies lesson	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal for Lesson & Learning Studies	6. 最初と最後の頁 305 ~ 317
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1108/IJLLS-05-2022-0072	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴田 好章	4. 巻 0
2. 論文標題 一人一人の子どもの豊かな学びを実現する授業研究の課題 - データ駆動型社会を展望して -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本教育方法学会 2022年度若手支援企画・第25回研究集会報告書	6. 最初と最後の頁 62 - 71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴田 好章	4. 巻 418
2. 論文標題 「できごと」としての教育 : 社会科の初志をつらぬく会の意義と課題を展望して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 考える子ども	6. 最初と最後の頁 8-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹下 悠史	4. 巻 418
2. 論文標題 今日の教育改革が求める「抗生物質」的対応と「漢方薬」としての初志の会	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 考える子ども	6. 最初と最後の頁 32-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 CAI Yuying、柴田 好章	4. 巻 2022
2. 論文標題 授業における学習者相互の学び合いにおける感情の動きの解明	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究報告集	6. 最初と最後の頁 292 ~ 299
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15077/jsetstudy.2022.4_292	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shirley Tan, Shiho Nozaki, Hongxue Fu & Yoshiaki Shibata	4. 巻 43(1)
2. 論文標題 The principles of teacher 's decision-making in Japanese board writing (bansho) process	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Asia Pacific Journal of Education	6. 最初と最後の頁 236-251
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/02188791.2021.1924119	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 埜崎 志保	4. 巻 68(1)
2. 論文標題 主体形成としての対話に関する考察 (1) - 「主体的・対話的で深い学び」の批判的検討-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)	6. 最初と最後の頁 25-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 埜崎 志保	4. 巻 47
2. 論文標題 問題解決学習における主体的な価値調整の過程と成立要因の解明- 「効率と公正」に着目した中学校3年社会科の授業分析-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育方法学研究	6. 最初と最後の頁 1 - 11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18971/nasemjournal.47.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 CAI Yuying・柴田 好章	4. 巻 2021(4)
2. 論文標題 表情分析の活用による授業分析の試み 教師の発話内容による子どもの感情の変化に注目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究報告集	6. 最初と最後の頁 216-222
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15077/jsetstudy.2021.4_216	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 柴田好章	4. 巻 20
2. 論文標題 一人一人の子どもの豊かな学びを実現するための授業研究の役割	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中部教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ヘンダヤナ スマール(著)、ファウザン アーダン ヌサンタラ・柴田 好章(訳)	4. 巻 30
2. 論文標題 インドネシア2013年カリキュラムの特徴と展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 カリキュラム研究	6. 最初と最後の頁 57-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18981/jscs.30.0_57	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Sarkar Arani, Mohammad Reza; Shibata, Yoshiaki; Cheon, Ho-seong; Sakamoto, Masanobu; Kuno, Hiroyuki	4. 巻 42(2)
2. 論文標題 Comparison as a Lens: Interpretation of the Cultural Script of a Korean Mathematics Lesson Through the Perspective of International Lesson Study	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Educational Practice and Theory	6. 最初と最後の頁 57-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7459/ept/42.2.05	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 サルカール アラニ モハメッド レザ	4. 巻 399
2. 論文標題 日本の学校における教師の学びの場の意義と課題-国際比較授業分析の立場から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 考える子ども	6. 最初と最後の頁 2 - 7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本 将暢, 丹下 悠史, 柴田 好章, 桒寄 志保, 徐 曼, 向井 昌紀, 石黒 慎二, 水野 正朗, 副島 孝, 胡田 裕教, 清水 克博, 中島 淑子, 花里 真吾, 田中 眞帆, ファウザン アーダン ヌサンタラ, 久川 慶貴, 久留島 夕紀, 小國 翔平, 王 瀟, 寺田 実智, 子	4. 巻 66(2)
2. 論文標題 授業における子どもの認識の展開過程の可視化 : オントロジーを利用して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 教育科学	6. 最初と最後の頁 157 - 172
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18999/nueduca.66.2.157	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 柴田 好章, 石原 正敬	4. 巻 66(2)
2. 論文標題 名古屋大学教育方法研究室における「授業分析」と「R.R. 方式」の教育評価論としての意義の再検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 教育科学	6. 最初と最後の頁 139 - 155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18999/nueduca.66.2.139	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 桒寄 志保	4. 巻 66(2)
2. 論文標題 「社会科の初志をつらぬく会」における問題解決学習の今日的意義 : 「切実性論争」の再検討を手がかりに	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 教育科学	6. 最初と最後の頁 33 - 44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18999/nueduca.66.2.33	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 柴田 好章	4. 巻 396
2. 論文標題 新学習指導要領の理論的課題：問題解決学習の立場から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 考える子ども	6. 最初と最後の頁 6-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴田 好章	4. 巻 392
2. 論文標題 一人一人の子どもに応じた教育実践を展開するために：授業記録にもとづく授業研究による教師の発達	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 考える子ども	6. 最初と最後の頁 22-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本 將暢	4. 巻 66(1)
2. 論文標題 授業分析におけるデータサイエンス活用の可能性：潜在的意味解析を用いた逐語記録の分節わけの試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 教育科学	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18999/nueduca.66.1.1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計27件(うち招待講演 3件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 柴田 好章, 水野 正朗, 小倉弘之, 林 文通, 林 エミ, 土屋 花琳, 丹下 悠史, 花里 真吾, 王 瀟, 大岩 俊之, 朱 誉, 西浦 明倫, 廉賀, 桒崎 志保
2. 発表標題 問題解決学習における子どもの思考の相互関連 -中間項を用いた思考様式の顕在化を通して-
3. 学会等名 日本教育方法学会第59回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yushi Tange
2. 発表標題 Development of an Analytical Method for Moral Education in Elementary and Junior High Schools: Focusing on Students' "Ego Involvement"
3. 学会等名 World Association of Lesson Studies 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 桒寄 志保・丹下 悠史・水野 正朗・王 瀟・林 エミ・朱 誉・鈴木 正幸・孫 銘悦・田中 真帆・ファウザン アーダン ヌサンタラ・渡邊 美紀・王 萌・サイ シュシャン・サイ コクイン・西浦 明倫・小倉 弘之・林 文通・土屋 花琳・廉 賀
2. 発表標題 問題解決学習における解決の見通しの構成に関わる諸要因の関連構造 - 中間項を用いた子どもの思考過程の再構成を通して -
3. 学会等名 日本教育方法学会第58回大会 山口大学 一般研究発表
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 坂本 將暢
2. 発表標題 教育の科学化を志向した授業記録とのオープンエンドな対話 -なぜ授業記録を使って分析するのか-
3. 学会等名 日本教育方法学会第58回大会 山口大学 課題研究発表
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柴田 好章
2. 発表標題 一人一人の子どもの豊かな学びを実現する授業研究の課題 - データ駆動型社会を展望して -
3. 学会等名 日本教育方法学会 第25回研究集会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柴田好章
2. 発表標題 一人ひとりの個が育つ協同の教育のあり方
3. 学会等名 日本協同教育学会第17回大会 岡山大学(オンライン) シンポジウム 「令和の日本型学校教育」と協同教育(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 寺田 実智子・朱 誉・坂本 將暢・柴田 好章
2. 発表標題 大学数学講義における学習内容の関連構造の分析(2) - 理学部数理学科「線形代数」を対象に -
3. 学会等名 日本教育工学会 2022年春季全国大会 鳴門教育大学(オンライン) 一般研究発表
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 石原 正敬・柴田 好章
2. 発表標題 授業研究における理論と実践の乖離とその克服過程の再検討 - 砂沢喜代次の「教授 - 学習過程の構造分析」と「教育認識論」を手がかりに -
3. 学会等名 中部教育学会 第69回大会 名古屋大学(オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩崎 公弥子・ファウザン アーダン ヌサントラ・坂本將暢・柴田好章・石原正敬
2. 発表標題 問題解決学習における多様な視点を有する子どもの思考の構造的把握 - 語彙の出現頻度と中間項を用いた子どもの発言の解明 -
3. 学会等名 中部教育学会 第69回大会 名古屋大学(オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柴田 好章・坂本 將暢・桮寄 志保・岩崎 公弥子・丹下 悠史・田中 眞帆・王 瀟・鈴木正幸・石原 正敬・水野 正朗・花里 真吾・FAUZAN AHDAN NUSANTARAv・王芳序
2. 発表標題 協同的な探究における子どもの多面的・多角的な思考様式の解明 - 中間項を用いた潜在的諸要因の関連構造の明示化を通して -
3. 学会等名 日本教育方法学会第57回大会 宮城教育大学(オンライン開催) 自由研究発表
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 水野 正朗・サルカール アラニ モハメッド レザ・柴田 好章
2. 発表標題 「ねりあげ」という文化的スクリプトからみた真正の学びの構造
3. 学会等名 日本教育方法学会第57回大会 宮城教育大学(オンライン開催) 自由研究発表
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ファウザン アーダン ヌサントラ・柴田 好章
2. 発表標題 小学校理科授業における学習者の認知状況と発言内容の乖離 - 思考様式の対称性に着目して -
3. 学会等名 日本教育方法学会第57回大会 宮城教育大学(オンライン開催) 自由研究発表
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 王 芳序・柴田 好章
2. 発表標題 授業における沈黙の意義 - 中学校社会科の授業分析を通して -
3. 学会等名 日本教育方法学会第57回大会 宮城教育大学(オンライン開催) 自由研究発表
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柴田 好章・サルカール アラニ モハメッド レザ・坂本 將暢・ファウザン アーダン ヌサンタラ・タン シャーリー
2. 発表標題 授業記録にもとづく比較授業分析 日本の理科授業にみる学びの固有性と普遍性の探究
3. 学会等名 日本教育方法学会第57回大会 宮城教育大学(オンライン開催) ワークショップ
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柴田 好章・丹下 悠史・田中 真帆・石原 正敬・水野 正朗・埜崎 志保・花里 真吾・坂本 將暢
2. 発表標題 中間項を用いた授業分析による発言の意図・含意・文脈の解明
3. 学会等名 日本教育方法学会第56回大会 宮崎大学(オンライン開催) 自由研究発表
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石原正敬・柴田好章
2. 発表標題 授業記録をもとにした授業研究による子どもの思考過程の解明の可能性と課題 - 北海道大学砂沢グループと名古屋大学重松グループの比較を通して -
3. 学会等名 日本教育方法学会第56回大会 宮崎大学(オンライン開催) 自由研究発表
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柴田 好章
2. 発表標題 ウィズコロナ・ポストコロナ時代の授業論・学力論の展望 - 「今、ここにいる、私たちの学び」が意味するもの -
3. 学会等名 日本教育方法学会第56回大会 宮崎大学(オンライン開催) シンポジウム「危機的状況によって問われる授業と学力」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 SHIBATA Yoshiaki
2. 発表標題 Transcript-Based Lesson Analysis to Bring the Alternative Views of Equity
3. 学会等名 WALS2020 International Conference (the World Association of Lesson Studies), Roundtable 'Reorienting Equity of Education through Transcript-Based Lesson Analysis' (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Lesson Study as an Effort to Ensure Students' Learning: Analyzing students' understandings and reasonings through transcript-based lesson analysis
2. 発表標題 Fauzan Ahdan Nusantara, SHIBATA Yoshiaki
3. 学会等名 WALS2020 International Conference (the World Association of Lesson Studies), Roundtable 'Reorienting Equity of Education through Transcript-Based Lesson Analysis' (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Lesson Study for Equity of Education: Promoting students' learning to the relevancy of real society problem
2. 発表標題 NOZAKI Shiho, SHIBATA Yoshiaki
3. 学会等名 WALS2020 International Conference (the World Association of Lesson Studies), Roundtable 'Reorienting Equity of Education through Transcript-Based Lesson Analysis' (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 寺田 実智子・小國 翔平・中島 一樹・柴田 好章
2. 発表標題 大学数学講義における学習内容の関連構造の分析
3. 学会等名 日本教育方法学会 日本教育工学会 2021年春季全国大会 関西大学(オンライン開催) 一般研究発表
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柴田 好章, 石原 正敬
2. 発表標題 教育評価における子ども理解のあり方 ～問題解決学習の理論構築をめざす名古屋大学教育方法研究室の初期の活動を手がかりに～
3. 学会等名 中部教育学会第68回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柴田 好章
2. 発表標題 (シンポジウム)一人一人の子どもの豊かな学びを実現するための授業研究の役割
3. 学会等名 中部教育学会第68回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柴田 好章, 石原 正敬
2. 発表標題 名古屋大学教育方法研究室における教育評価と子ども理解 -授業分析と R.R. 方式の成果と可能性-
3. 学会等名 日本教育方法学会第55回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂本 將暢, 丹下 悠史, 柴田 好章, 桒寄 志保, 水野 正朗, 向井 昌紀, 石黒 慎二, 徐 曼
2. 発表標題 授業における子どもの認識の展開過程の可視化
3. 学会等名 日本教育方法学会第55回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柴田 好章, サルカール アラニ モハメッド レザ, 坂本 将暢, ファウザン アーダン ヌサンタラ
2. 発表標題 (ワークショップ) 授業逐語記録にもとづく比較授業分析 インドネシア理科授業における生徒相互の関わり合いを中心に
3. 学会等名 日本教育方法学会第55回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中 真帆, 柴田 好章
2. 発表標題 授業観の変容の機会としての授業検討会の意義
3. 学会等名 日本教育工学会 2019年秋季全国大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 サルカール アラニ モハメッド レザ	4. 発行年 2023年
2. 出版社 日本教育方法学会編『新時代の授業研究と学校間連携の新展開 (教育方法 52)』図書文化社, pp 154-168, 全176頁	5. 総ページ数 15
3. 書名 (分担執筆)「授業研究の国際的な展開の動向と研究・実践の焦点と課題—世界授業研究学会(World Association of Lesson Studies: WALs)を中心に—」	

1. 著者名 Masanobu Sakamoto, Shirley Tan, & Stephane Clivaz	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Association for the Advancement of Computing in Education (AACE) "Exploring New Horizons: Generative Artificial Intelligence and Teacher Education", pp.178-208 / 260	5. 総ページ数 31
3. 書名 (分担執筆) Social, Cultural and Political Perspectives of Generative AI in Teacher Education: Lesson Planning in Japanese Teacher Education	

1. 著者名 柴田好章	4. 発行年 2024年
2. 出版社 土屋武士・真島聖子・白井克尚 編『子どもがつながる社会科の展開 ~地域・世界と共に~』日本文教出版, 22-35頁, 全249頁	5. 総ページ数 14
3. 書名 (分担執筆) 子どもが地域・社会と共につながる問題解決学習	

1. 著者名 坂本 將暢	4. 発行年 2022年
2. 出版社 図書文化	5. 総ページ数 14
3. 書名 「学校を基盤とした協働型授業研究」 日本教育方法学会編『教育方法51 教師の自律性と教育方法』 pp.123-136	

1. 著者名 丹下 悠史	4. 発行年 2023年
2. 出版社 唯学書房	5. 総ページ数 10
3. 書名 「豊かな学びを保障する教育を目指して」西尾 敦史・大勝 志津穂・尚 爾華 編『人間健康学』 pp.200-209	

1. 著者名 Arani, M.R.S., Mizuno, M., Shibata, Y.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 25
3. 書名 Neriage as Japanese Craft Pedagogy: Cultural Scripts of Teaching That Promote Authentic Learning. In: Zajda, J., Majhanovich, S. (eds) Discourses of Globalisation, Ideology, Education and Policy Reforms . Globalisation, Comparative Education and Policy Research, vol 26, pp.113-137	

1. 著者名 柴田好章	4. 発行年 2021年
2. 出版社 図書文化社	5. 総ページ数 14
3. 書名 ウィズコロナ,ポストコロナ時代の学校での学びの展望と課題 - 『今,ここにいる,私たちの学び』を求めて - . 日本教育方法学会編 パンデミック禍の学びと教育実践, pp.78-91	

1. 著者名 柴田 好章, 坂本 将暢, G.バルマー, Bホシチメグ, N.ドラムジャブ, E.ムンフバト) (アルンジャルガル,	4. 発行年 2021年
2. 出版社 (モンゴル国立教育大学)	5. 総ページ数 98
3. 書名 "TBLA" (「TBLA」授業研究方法論)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	坂本 将暢 (Sakamoto Masanobu) (20536487)	名古屋大学・教育発達科学研究科・准教授 (13901)	
研究分担者	サルカルアラニ モハメドレザ (Sarkar Arani Mohammad Reza) (30535696)	名古屋大学・教育発達科学研究科・教授 (13901)	
研究分担者	埜崎 志保 (Nozaki Shiho) (10806475)	東海学園大学・教育学部・講師 (33929)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	丹下 悠史 (Tange Yushi) (50801726)	愛知東邦大学・人間健康学部・助教 (33937)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 授業研究国際センター 第12回研究セミナー	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 授業研究国際セミナー 「モンゴルの算数授業を対象とした授業分析研究 ~FAMによる授業 デザインとTBLAによる授業分析~」	開催年 2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関